

中井 上宗雄 編
村文

中世百首歌

九

古典文庫

中井 村上 宗雄
村 上 文雄
編

中世百首歌

古典文庫

平成六年一〇月二〇日印刷発行

非売品

歌首百世中

九

編者

中井 村上 宗文雄

発行者 吉田 幸一

印刷者 白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 〇三(三九一〇)二七一一七
振替口座東京〇〇一九〇九一四五九七番

目次

一	堯孝一夜百首……………	七
二	秋日同詠百首和哥（飛鳥井雅永）……………	二七
三	濟繼朝臣詠哥……………	四七
四	百首和歌（姉小路基綱。文明二年二月）……………	五七
五	百首（文明十一年）……………	八三
六	冬日同詠百首和哥（文明十一年水無瀬宮法樂）……………	九五
七	百首（文明十五年九月二日大樹着到）……………	一一五
八	百首（明応二年賦四序艷詞雜詠和哥）……………	一三五
九	百首 明応三年九月九日着到……………	一五九

一〇	百首 明応五年冬……………	一七五
二	百首 (文龜元年)……………	一九五
三	兩卿百首 (実隆・基綱。明応七年春 春日社法樂)……………	二一五
三	〔兩卿百首 明応七年冬 春日若宮法樂〕……………	二三五
四	秋日同詠五十首和哥 (文明十七年)……………	二五五
五	五十首 文明十三年十二月廿日庚申……………	二六七
六	三十首 飛州作……………	二七九
七	〔長享三年七月基綱室家逝去之哀傷十首〕……………	二八七
八	〔兩卿明月論十五首 文明十八年八月十四夜〕……………	二九三
	解題……………	三〇一
	初句索引……………	三三三

凡例

一、「中世百首歌」は次の要領によつて翻刻刊行する。

- (1) 平安末期から江戸ごく初期（慶長頃）までの個人百首を原則とする。
- (2) 比較的披見・入手しやすい左記叢書所収のものを除く。

「群書類従（正統）」「私家集大成」

但し右所収の百首でも、異本関係にあるもの、また右所収の百首が必ずしも善本でなく、他に善本・原本・古写本等の類がある場合は収める。

- (3) ある契機によつて複数歌人がそれぞれ百首歌を詠じ、それが一括されて定数歌集となっている場合（例えば正治百首や着到歌会歌集など）、また形態的に百首歌でないもの（例えば個人百首を基にして成立した千五百番歌合など）は除くが、その中の個人百首が独立した伝本として存し、かつそれが善本・異本（原本・草稿本・完成本の類）であるような場合は収める。

- (4) 定数歌が私家集の一部であるもの（私家集の一部に百首として存在するも

の。例えば拾遺愚草・草根集中のもの）は除くが、百首歌が集積されて家集となつている場合で、(2)に未収のものは収める。

(5) 偽書・仮托と目せられる百首（例えば鷹百首の類）は伝承作家のものとしては扱わず、中世成立のものについては将来の課題として考え、ここでは除いておく。

(6) 以下、同じ流派の人々や、ほぼ同時期の百首をまとめて一冊として刊行する。本冊には姉小路基綱を中心とする室町中期の百首を収めた。

二、翻刻は次の方針で行った。

(1) 漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名などはすべて底本のままとしたが、漢字は常用字体あるものはそれに、変体仮名は通行の字体に改めた。

(2) 私注はすべて（ ）に入れて示した。

(3) 底本で一首が二行（またはそれ以上の行）書きの場合は、改行の部分を一字あきとした。

(4) 三は百首歌の残欠本と見て収めた。また四一八は一冊の本に収めている

ので、百首以外のものをも含めてすべて翻刻した。

- (5) 各定数歌ごとに漢数字で番号を与え、それぞれに歌番号を算用数字で施した。

- (6) 一および三は宮内庁書陵部本を、二は立教大学日本文学研究室本を、四一八は大阪府立図書館本を底本とした。翻刻を許可された上記各図書館等の機関とその職員の方々に厚く御礼申上げる。

- (7) 校合本の存する四一八について、本書の性質上、校異を詳しく加えることはしなかったが、他本によって意味の変る所に限り、校異を加えた。校異のつけ方は解題を参照されたい。

- 三、解題は基本的な事項を示すに止めた。

- 四、初句索引を添えたが、索引の冒頭に凡例を記したので参照されたい。

一九九四年一月

井上 宗雄
中村 文

一
堯孝一夜百首

堯孝一夜百首

立春氷

1 峯の雪汀のこほりとけそめて 道もさたかに春や来ぬらん

初春霞

2 棹ひめのたつやかすみのたもとまで ゆたかにみえて春はきにけり

雪中若菜

3 春なからけふもみゆきはふるさとの よしのゝわかなたれかつむらん」 1才

初鶯

4 今朝きなきいまたにははぬこすゑにも はなやたつぬる鶯の声

軒梅

5 朝戸出の袖にそふかき夜床まで にほひもりこし軒の梅か枝

門柳

6 浅みとりなひくをみれはたかゝとも 行すきかての青柳のかけ

帰雁知春」^{1ウ}

7 ゆくゑなき空には何をしるへとて はるをかきりにかへる雁かね

二月余寒

8 やまたかみのこれる雪かしろたへの ころもきさらきさゆる春かな

故郷春月

9 たかまとや尾上のみやはふりはてゝ むかしの月そかすみのこれる

夜春雨

10 鐘の音は猶うつもれてはるのよの」^{2オ} 更行ほとそ雨にしらるゝ

春日遅

11 道ひろく言葉のはなをたつぬまで なかきはるひもあかてくらしつ

尋花

12 高砂やまつかけちかくわけ過て はなをそ春はしる人にせむ

見花

13 けふいくかはなになれけんしら雲の たなひくやまをわか宿にして」^{2ウ}

翫花

14 かさすにも見るにもあかぬはなさくら そめて心のいろにふかめむ

折花

15 散まてのやとりをちきる花をさへ なをあやにくに折やとらまし

惜花

16 老となる身をはわすれてさくらはな ふりゆくかけをしたひわひつゝ

三月三日」^{3オ}

17 きみか代にいくよの春かめくりあはん 三千とせちきる花のさかつき

款冬

18 春ふかき色をしめたるやまふきの はなにともなふるてのさと人

松間藤

19 はるくるゝまつの木の間にかくふしや こゝろつくしの色を見すらん

三月尽夕

20 くれてゆく春はけふまで初瀬やま」^{3ウ} 入逢のかねやあすもきかまし

卯花似月

21 玉川やくるゝかきほの卯のはなは 月かあらぬか波のこゆるか

待郭公

22 つれなくてまつよひ過るほとゝきす 猶有あけの空にたのまむ

祢覚郭公

23 うかりけるね覚の空のほとゝきす おもひつきせぬ音をやそふらん」^{4オ}

五月郭公

24 ほとゝきす啼や五月の雨そゝき よにふる声もあかすそ有ける

庵五月雨

25 誰かこむやまのしつくも谷みつも ましはの庵のさみたれのころ

夏草露

26 しけりあふ庭のよもきふすゑとちて なをわけかぬる露のした道

里蛩⁴」ウ

27 今もなをあつめしまとの名残とや ふりぬるさとにとふほたるかな

夜篝火

28 ほともなきあかつきやみのうかひふね こゝをせにとやかゝりさすらん

遠夕立

29 めくり来ていつ夕たちになる神の 音もとをちのむら雲の空

樹陰納涼

30 夕くれははもりの神もゆるさなん⁵オ すゝしさあかぬ柏木のかけ

初秋風

31 吹風の音にしられていろかへぬ まきもひはらも秋たちにけり

初秋露

32 あきゝぬと露を葉分に吹上や をのゝ浅茅生風なひくなり

七夕後朝

33 今朝はさそあまの河なみたちかへり またもあふせのほしあひの空」 5ウ

秋夕

34 こゝろなき草木もあきのあはれをは おもひをしらん夕暮の空

夜萩

35 むすひてし夢ものこらす萩のはの つゆふきはらふ夜半のあらしに

朝萩

36 今朝はまたなひくともみす小萩はら ふかきよのまの露もしられて

夕薄」 6オ

37 うすきりのまかきになひくむらすゝき ほのかに見えて夕風そふく

山初雁

38 霧まよふあさけのそらに峯こえて 日かけをわたるはつかりの声